繪詞要略

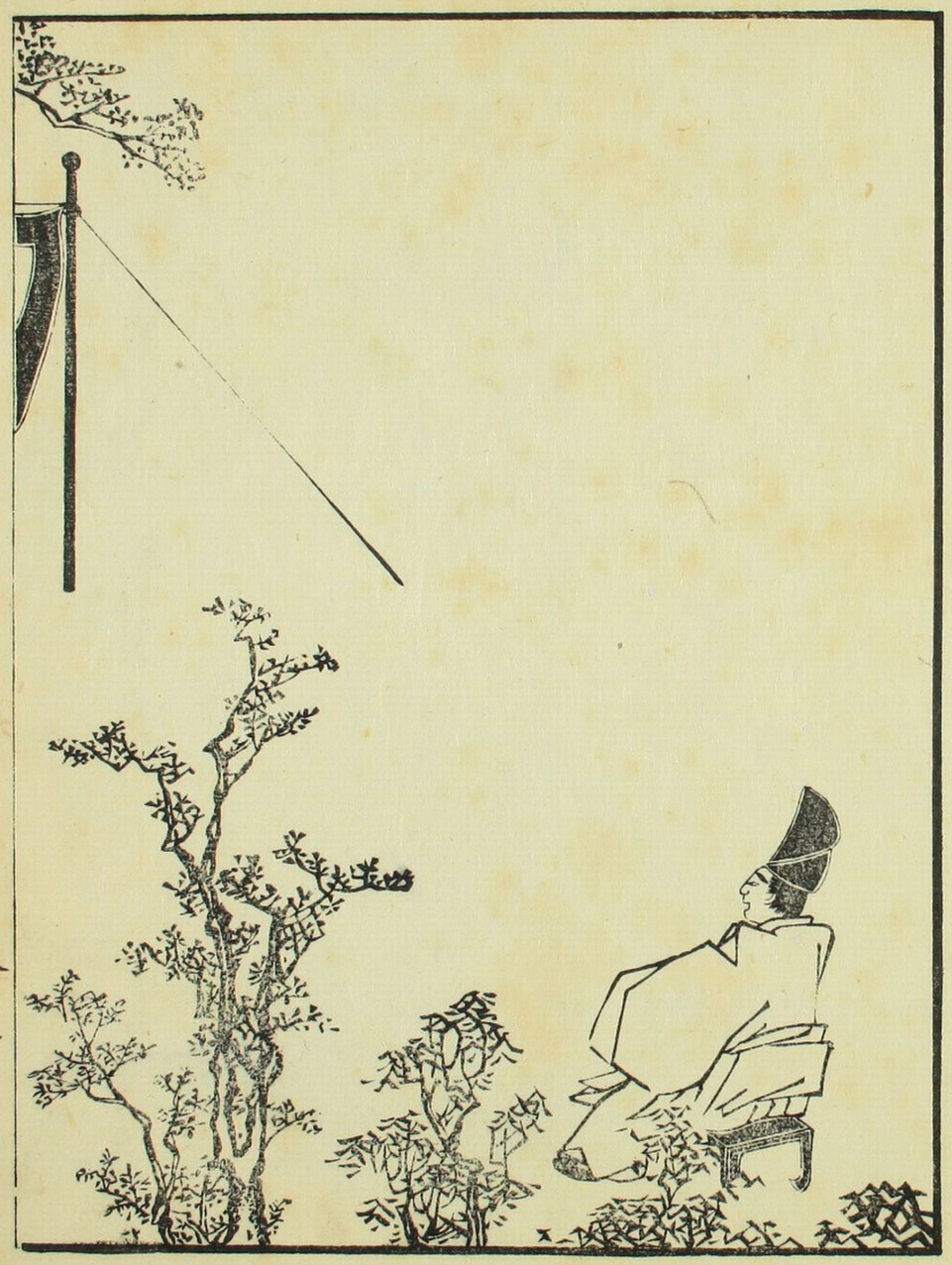
誓願寺縁起

下

人皇五十代　桓武天皇の御宇。延暦三
年甲子。南京を山背國と訓郡へ遷せ
給へば。先此本尊をうつし奉り給
へ。天下安全寶祚延長乃御爲なり。
一の寶車に飾りて本尊を載奉り。
道路みい紫蕚を敷白布をのべ。勅使
先立給へば。俗人あまた列をひく。
上重之先行とぐ。こゝ地べ丈和一國乃
僧俗道の者ども。御名殘を惜

み幸ありて。遮羅雙樹下の御別を
に異あらず。是れ引こゝ此京乃貴賤
を。御遷座を待もうけて歡喜踊躍し。
首亀の浮木あへなぎさし。斯て王
城者東北より伽藍七堂の經營とて
れ道場なりとなり。都鄙乃衆諸繼
とゝ

人皇六十代　醍醐天皇。延喜二年
癸亥。　御母贈皇太后藤原胤子贈相國高藤公女の
御菩提の御爲なり。　宮葺とて澤土
三部經を御書寫あり。頓て龍駕
を幸ゝ。當寺へ臨幸まゝ。大元
帥集。無遮乃大會を始まる給
ひ。御志。本師釋迦佛摩耶夫人の御
爲なり。忉利天に登りて。恩經を繼給
ひ。思ひ出て行ゝ。を登き涉事あり

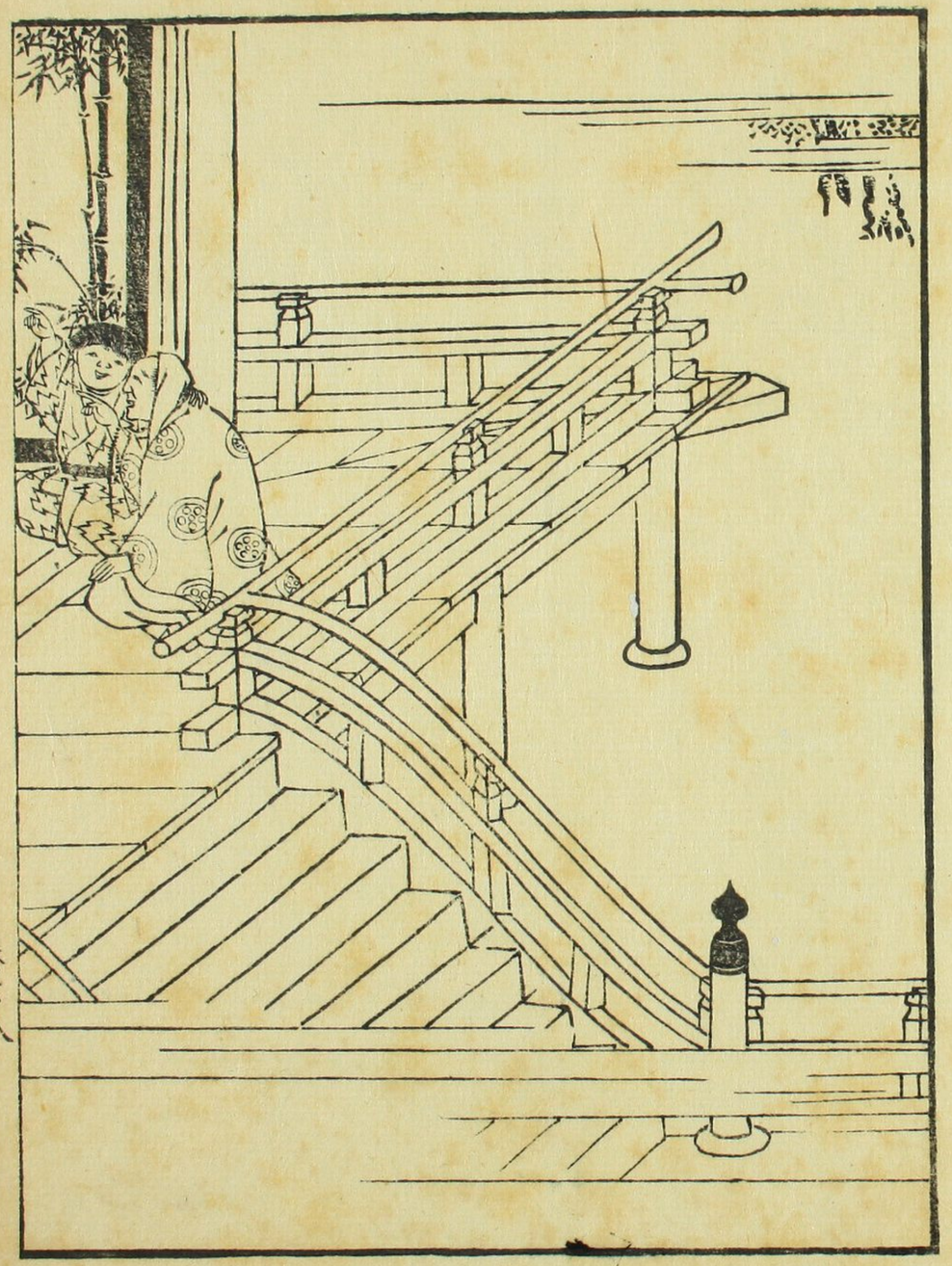


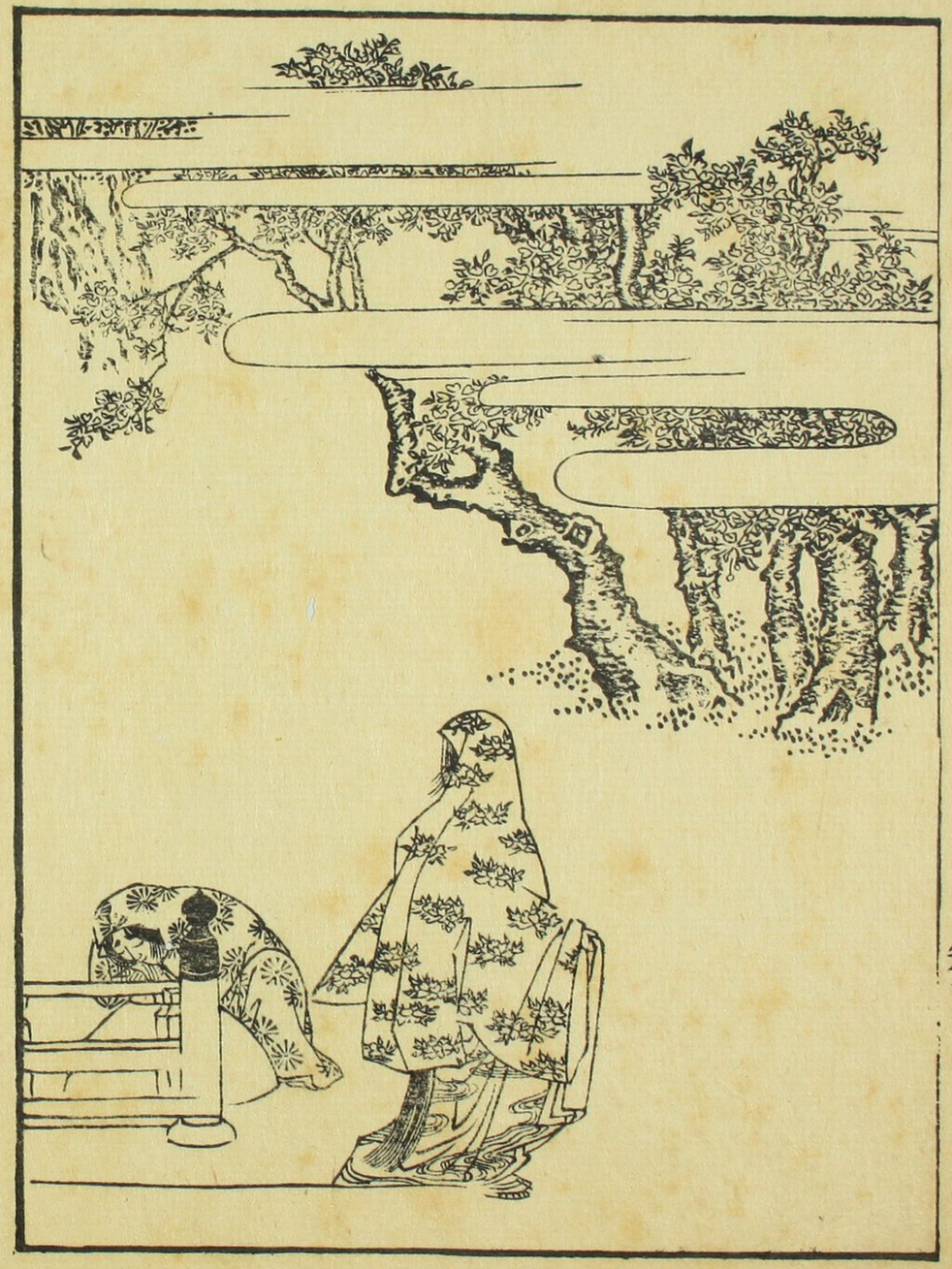
叡山横川首楞嚴院の源信僧都い。慧心院の僧都と號す。慈慧大僧正ゆ師として。止觀乃密ゆ眼をさとし。玄文の庫ゆ鍵を拆給ひく。台家の碩德並びなしとゝ。濁世末代乃目ゆ之い他力念佛の教行ゆ志くいちゝとゝ。自行化他專是に帰し給ふ。一期念仏の數二十倶低（百億を一倶低とゝ）および一乘乃善根。事理の功德。皆極樂ゆ

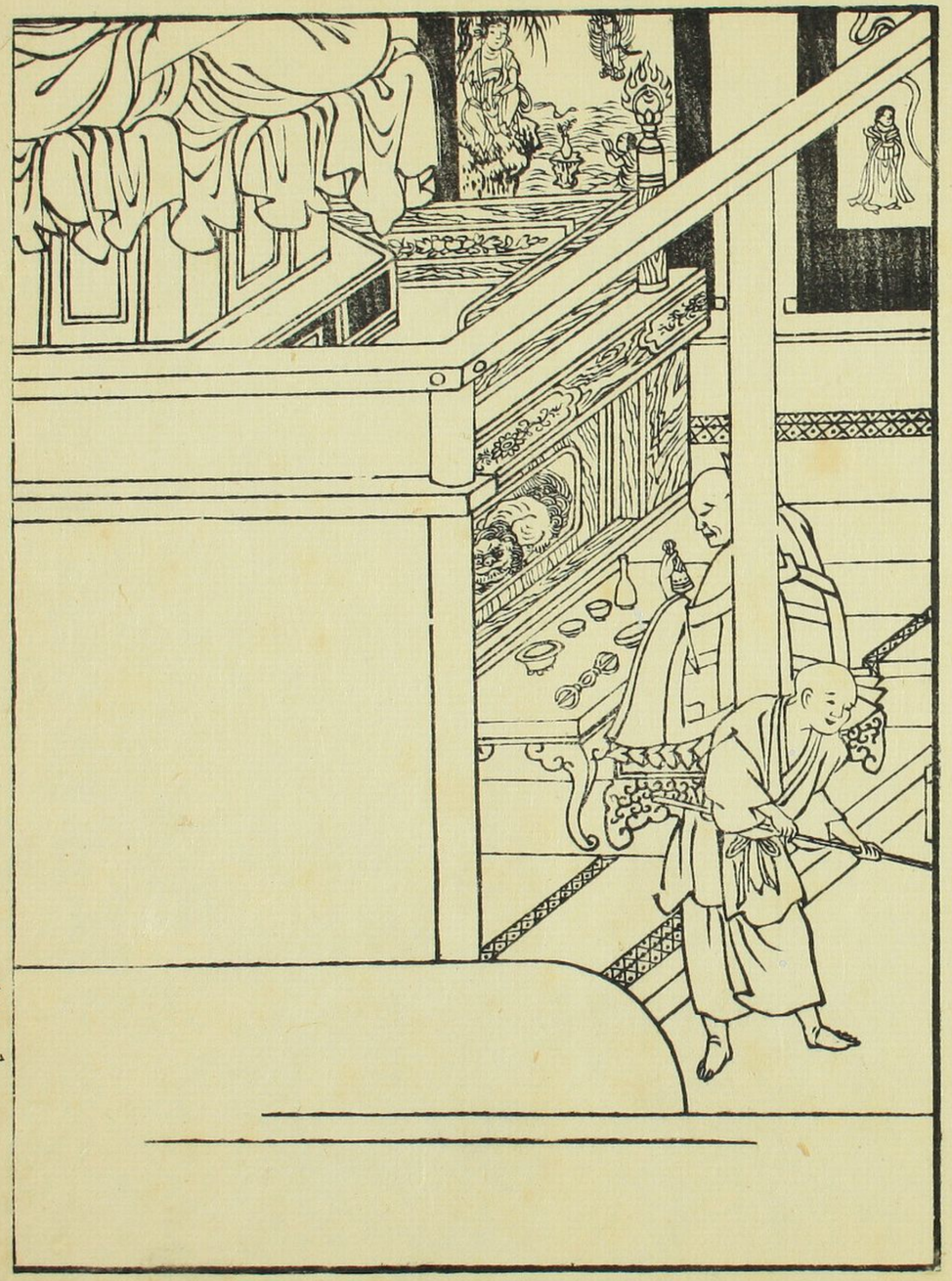
回向し。殊更當寺乃如來ゆ渇仰まして。けるゆ。ちきび或人僧都多年恭敬乃ゆ尊を拜し奉らんと望しゆと。雜陽藝願寺の如來ゆとぞ答給へる。既ゆして御歳五十乃時。當寺ゆて不斷念佛をとゞめ。滝留し給ふゆ五十餘日。其中間に善財童子五十餘の知識ゆ尋し。佛道を求め給ひし形儀自五十餘幅ゆ圖画し。是を内陣ゆかけて。

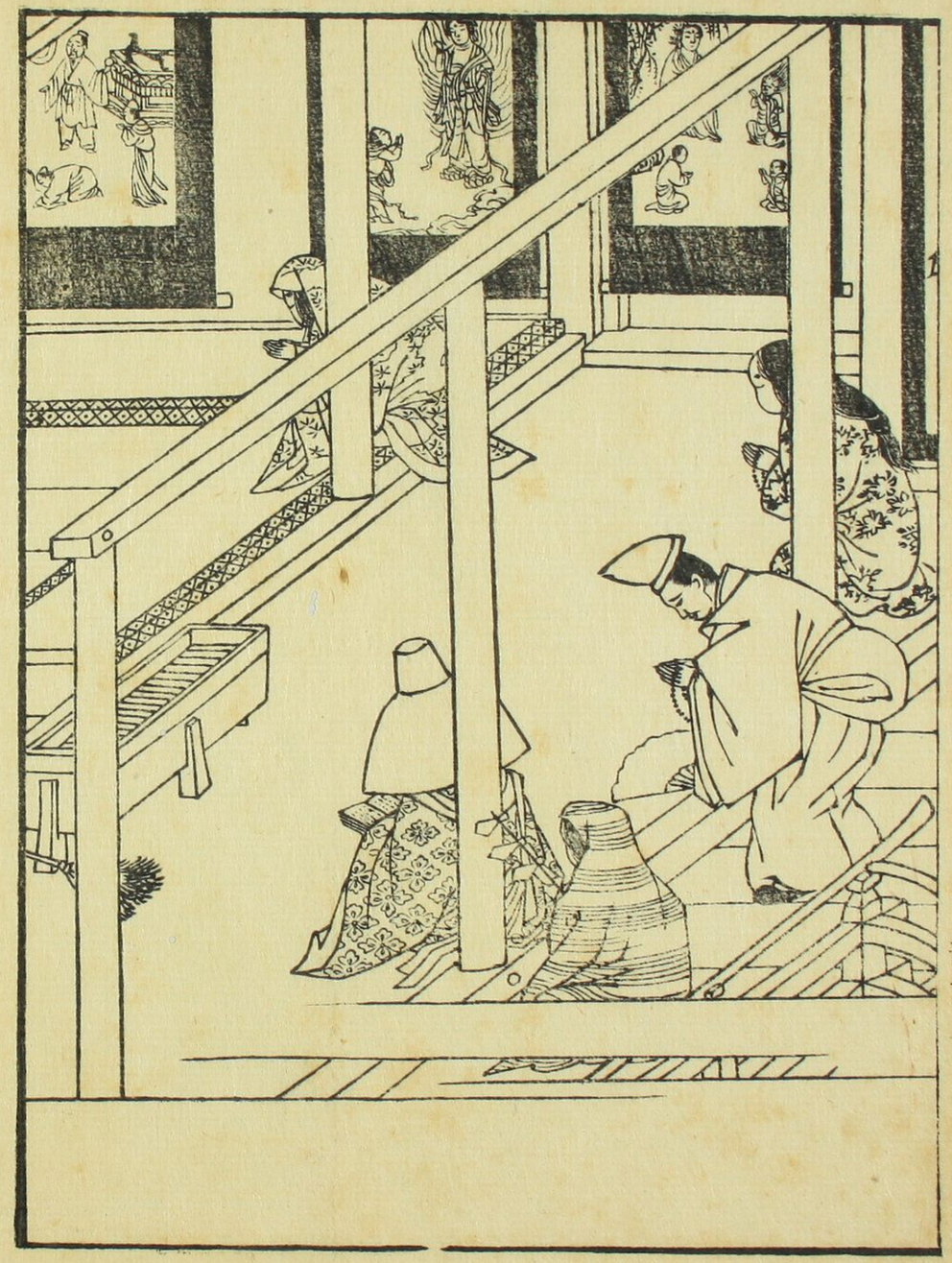
毎日稱揚讃嘆したまふ。且宣いく。善財童子い功徳雲比丘の所ゐて。甚深の念佛三昧を授受せり。今我も此如来を恭敬し奉て無とり彌陀三昧を修す。往生何ぞ疑あらんやと。ゆゑに道場乃聽衆を皆隨喜の涙を流しぬるもの。是我善財講と號す。即一卷の講式を編。此寺乃龕鑑り法へ給へ。是を誓願講式とと。又六道講式と。

或い二十五三昧式とと名ぢく。自雨土乃ゝ。毎月三五の日。如来前ゐて此式を行ひ。漸くに孫陁乃寶鞞を唱へて。六道受苦乃衆生に回向す。僧都慈心乃勸化誰ら仰信せざらん









上東門院乃女房和泉式部い。越前守
大江雅致朝臣女。和泉守橘道貞の妻
なりしを。頓て いづみと呼ぶ。道貞
はなれて後い。又丹後守保昌朝臣
に相馴て。共に丹後へと下りぬる。夫の
心あらぬ人。けるまで花人もと
睦びうつ。浮名たちまる事を多うら
しく。其才い又類ひなく。手
乃聞えありし。さきに其もとに式

部内侍も亦歌よみにて。やまとなる
人もとおりをを奉りに。病はきて
今い限りや見うつ時。母乃手紙を
もうく

いつこにか行覧れうことおもほゆる
親に先ぶる道ぞ迷はねば

やまんの口號を聞まうしうべ。和泉悲し
ひみ女人ぞ

小是あてたづらはら死をのこ

道をまなびて学問うたがはしきものゝ
やうにおぼえけれども甲斐なく。はかなく
憂世乃定めなきなりし。末の露とも
乃滴のとわかをとゝ思ひ立ちて。是より
佛乃道に志ふかく。其頃書寫山に
ゆきまして性空と人い。法華修行者
名徳なりと聞及びて。ひとしく同じき志
乃女房八人を伴ひ。遥々の旅路を経
て彼處に到りしが。上人いとゝまち六根

清を得給ひしかば。此女房達乃来るを
まち受け躙位まちをり。弟子達に
し給ひく。明日の暮に妖鬼八人来
るべし。さあらば汝ら鎮西乃方へ仏
法弘通に赴きまゐらせ教
て。特佛堂に引籠りおりて門を
ぬ。弟子達驚き怪。上人だに斯宣ふ
鬼に。我等いかでこの面をいくばくと。畏
きかのきしに成りかたし。顔花のぎ

く匂やうに。姿柳乃ごとくたをやうなる
女房達。葉乃扉を打たゝかせ。だうずう
る風情いとうるわしく見えてゐる。不審
あり〳〵是い定なく鬼神乃変化あるなど
しと。上人の仰乃まゝに紫へおゐて
ちう。急ぎ下向いたを門戸をかゝ閉い
ま。時に女房たち詮方なく。浅猿き身
乃程をいと思ひ乱て。袖い涙裳い露ま
ぢぼちり。漸暮ゆく空ゆ。高根乃松

乃間より月ほのぐ見えるまゝ武邪
冥たちうこさ道めぐ入ぬべき
けしきもてなせ山乃端去自
や誦じ奉れを。上人ゆ小閑ぢさす
ぐゆ裏とおぐし。さて。仏道を求むる
志乃浅うぬを去ちし。衆生濟度乃
誓をおもうあぐ。さてゆを漏さんと本
意ぞ。ぼとて。終に門ぢひらのをて對面ま
しく。往来罪悪乃懺悔。又往生浄土去

志願等を委く聞名て後示し給いく。
佛教多門あて機々相應あり。然る
り今法達の相應の法を思ふに。實に志
ところ乃ごく。往生極樂乃一門なるべし。
然らば京乃南男山の御社に詣で。一心
に神慮を求むべし。八幡大菩薩と申
す。本地極樂乃彌陀尊なり。結縁無
窮乃爲に和光の塵をまじへ給へ。必
感應あるべしと宣ひける。かゝる喜ばい

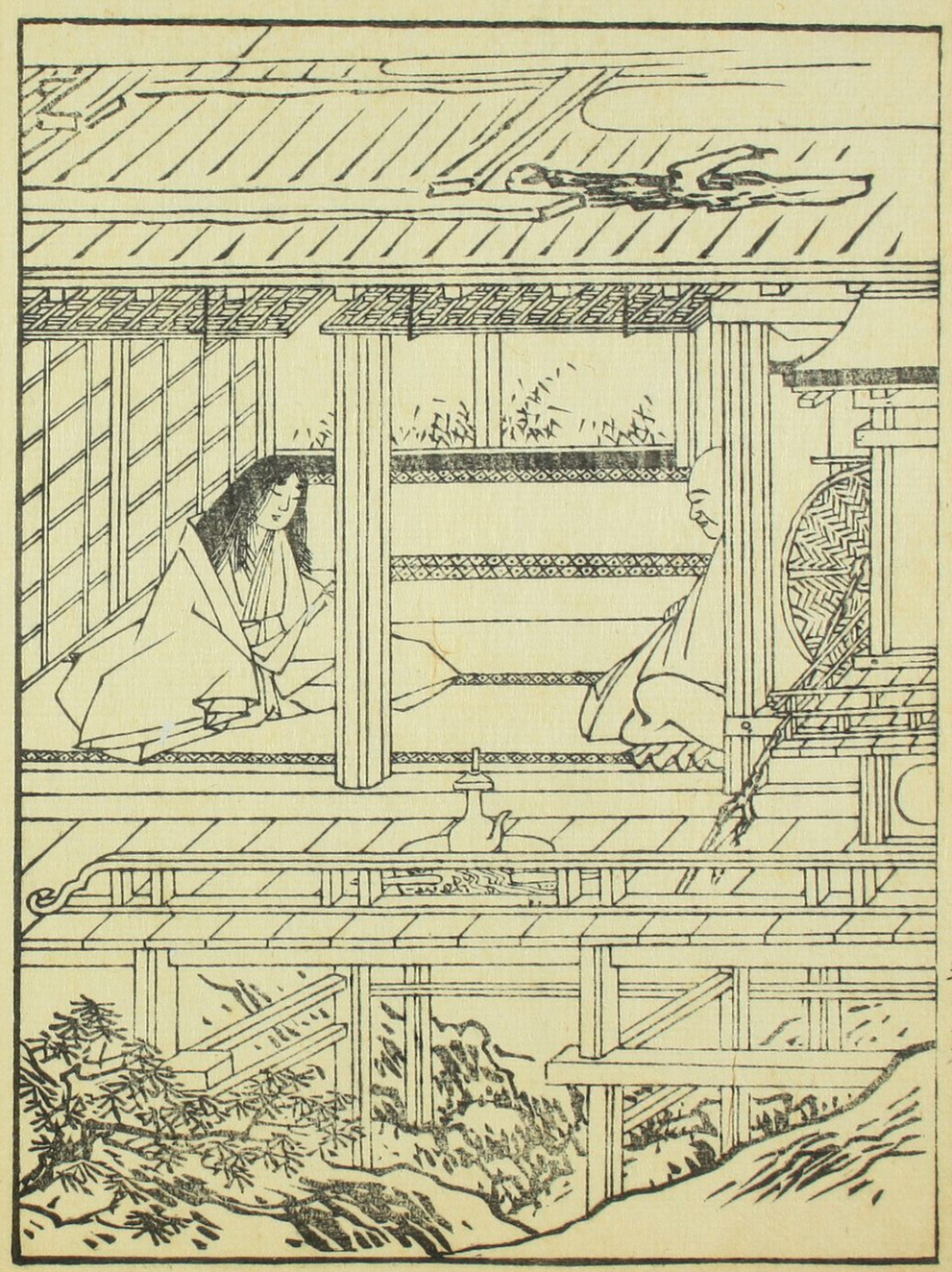
式部殺ゆまるを。八幡山に參て。七日七
夜御寳前に通夜申し丹誠を凝し。往
生乃要路を祈申さる。頃い秋乃半ばや
なれ月の曉ぐ。八旬許乃老僧出現あ
りて。いとと貴なる御聲もて告給ひる
る。汝往生乃直路をおもへ。京誓願寺
乃詣で祈ぐ。此本尊い慈悲萬
行の菩薩。春日大明神乃眞作。西方淨
土生身乃如來なり。超世の大願なり

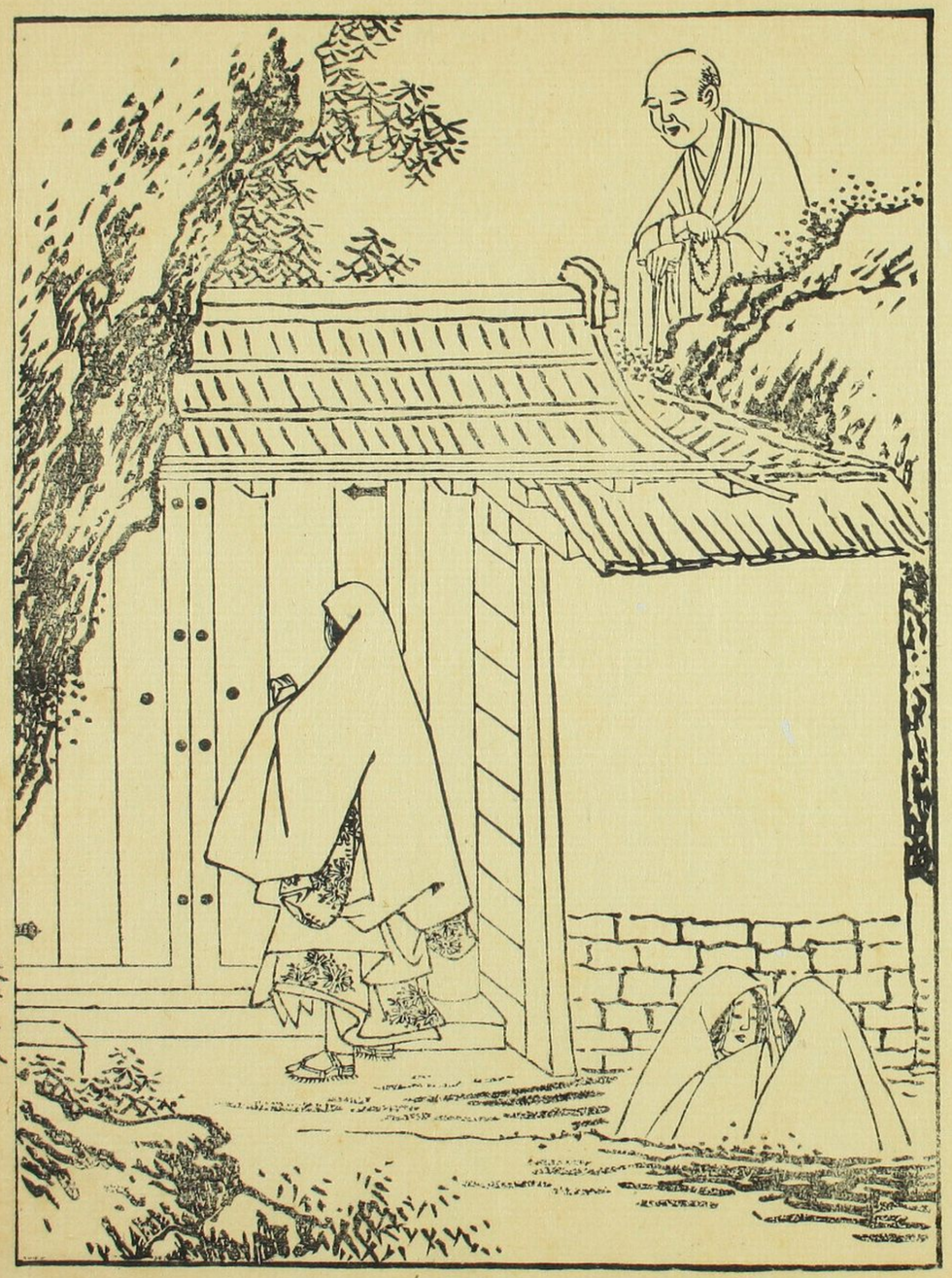
て。衆生を本國に導くべく假に願を起
し給ひすべし。此本尊に帰依して。禮
拜稱名畢命を期とし願を。懇に示
し給へ。感涙袖にせきあへず。頓て當
寺へ来る。四十八日の間籠居て。二六時
中專心に往生の要法を祈つるに。或
夜深更に及び暫眠つるに。七句
餘の老尼現し給ひ宣ひけるは。汝我を
頼む志真實なり。往生の願を
願ふ任すべし。夫往生極樂の教行は必
ず心を凝し身を責て願べしと。
助給へ。信心堅固にして南無阿弥陀
佛と唱へ。摂取の廣願あるなれば。殊
に女人の往生は三十五の本願の
中。彼章提希夫人。まのあたり如来を拜し
て女質を改めず。直に無生を證ずるも
願不可思議の得益なり。獨章提のみ
あらず。願文に。設我得佛。十方無量。不可

思議。諸佛世界。其有女人。聞我名字。歓
喜信樂。發菩提心。厭惡女身。壽終之
後。復為女像者。不取正覺乃誓のごとく。
末世の衆生と我本願を頼てこゝに。一心に
念佛せば決定往生疑なし。願願願行を
はゝ置て。唯一向に稱名念佛と示し給
へ。武都夢とおぼえて。歓喜の涙をゝ
ゝ合掌禮拜し奉つゝ。一心に南無
阿弥陀佛の御名を唱へて。さぶ

時をうつさゞるに。おのとなく
煩脳の雲をはらひ。心の月もすみまさり
たゝ広のゝまゝ。善哉汝ぢよ。
おこたるまじ。来迎摂取い。稱名乃あるよ
まゝ。ぶ。ぶ。ぶ。御聲乃うちふ。夢さめぬ。
のくて後武都い輪廻のきづな切持戒
清浄乃比丘尼と成ぬ。法名を専意と號
して。此寺乃傍に柴の庵を結びて住を
ゝ。御堂閣白道長公御建立ゆく。小御堂

と名ぜくるに一字を式部に賜らし。後寺内に引遷し。此室に籠居く。朝夕に本尊に詣る外に室を出ず。怠なく勤修励しが。終焉に臨みて仏の奇瑞を蒙り。免てたき往生を遂るる。此小御堂に隣寺の誠心院信に和泉式部と呼ぶ。當寺此地に遷りし時同じく移つる。



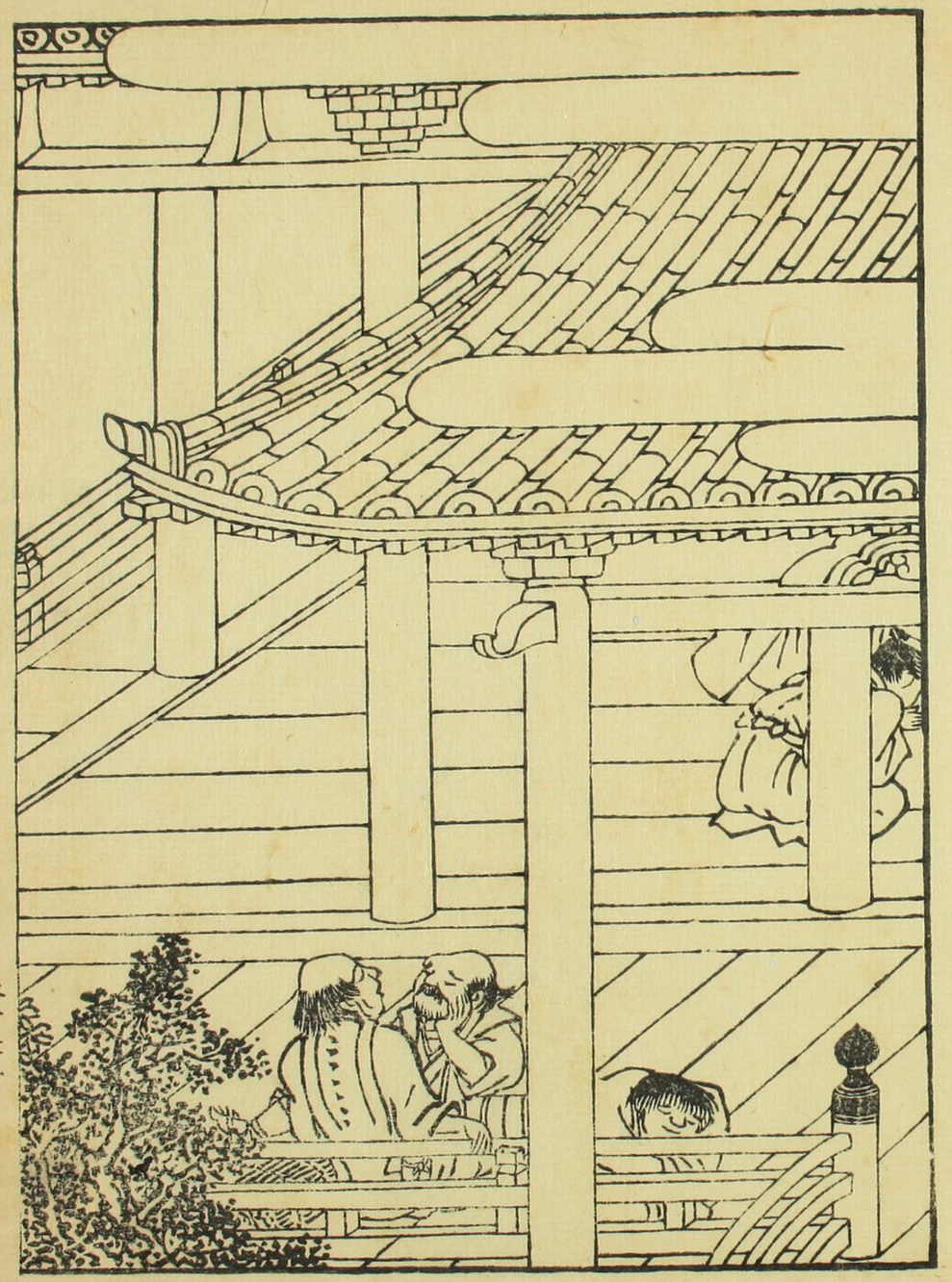


當寺い慧隱法師乃開基みて。元よ
り西方の教行いを顯揚すいくと。後
小元祖大師時々叡籠まして。法縁
淺からざる故。住持藏舞上人淨
土宗に改め給ひ後い西山善慧上人。深
竹隆信上人（園室と號す。淨草義乃祖なり。弘安七年四月十八日淨草真宗院小寂す。元和歌に名あり。[illegible]等に出でたり。[illegible]）相續で淨教を此
寺に弘通し給へり。嘉禎二年乃春。
光明峰寺殿下道家公。當伽藍に行て

七日乃佛事を營み。善慧上人に導
師と仰き給へ此善慧上人も。法然
上人の門第多き中みを。群を出て性
俊逸みて。よく淨土の法門乃意を得たる
ものなり。顯密事理み通じ給ひしの
ち。元仏にあしてて。專ら西方の
生佛に均しく。他に異なれ相を示現
しなまへい。叡慮神祈のいちじるし
きこと。甚深なり陳唱し給ひしなり。彼當

麻乃曼荼羅。中央の本尊に内髻の一相を織給いざらん同じゆ。弥陀如来乃本願大悲深重ナ切德を讃嘆し給へ。赤治の道俗希有乃おもいをなす。歡喜乃涙を催しをるる。ひて上人の門弟性達房一遍上人乃師真夜佛前ゑ籠居をるまるゑ。更闌ゑ及び。老尼二人あつのしげみ居まして相語ふ。何事にやとゆづつ聞ゑ。一人乃尼をゑの唱導いとゆ有難くやぼん侍つゆ

いへ。今一人乃尼。わきむ〳〵當麻寺みて淨土の曼荼羅を感得き〳〵時。化尼繒相乃理を一々ゆ說示し給ふ趣。ゑ上人の教勸と聊違ふまゝ。をわつ哉織女い西方乃教主尤面乃ほきち。春日明神乃本地又此上人と同じく此菩薩乃化現ゑれば。一體分身乃理誰ゑ信受せざるんやて。曼荼羅出現の由來時をゑつして語ゑる。かくて漸曙みゑて



めさゞ。西尼本尊を拜こ奉まて。別を
告堂内を出ぬ。性達房不審なりし
こゝを出て。西尼ハ何處よりか詣給し。如何
なる人なりと問るゝ。一人ハ法如。一人を
專意と答て。西門ゟ出らるゝ
給へ見失しぬ。法如ハ中將姫。專意
ハ和泉式部乃法號なり

義小一遍と人と聞えい。伊豫國河野七郎通廣の二男。幼名い松壽丸。初い天台家ゑ入。出家し隨緣と心しが。後ゑ性違と人ゑ從ひ。忽自力聖道乃學問を捨て淨土門ゑ帰し。名を智眞と改め給ふ。然れども大衆ゑ交ゆ。寺務にくげらゑ厭ひ。三熊野ゑ參詣ゆら。本宮證誠殿ゑ七日七夜籠ゑ給ふ。滿夜乃曉人靜ゑ。御燈の影幽なる

ゑ。白髮の山伏扉乃内ゑ出現ゆま せば。同じけまるが數百人從ひ奉ゑて 稽首禮拜す。此時白髮の御姿い權現ゑ ておゆまゑと尊くおぼゆるゑ。 立寄て宣いく。我い即西方の教主なり。濁 世乃衆生を憐ぶ爲ゑ此山ゑ跡を垂ぬ。汝 念佛弘通の志深く。我誓ゑかなひ。我化を 助く。實ゑ末法の導師利物の知識なり。是 ゑ急ぎ洛陽誓願寺ゑ詣て。念佛の

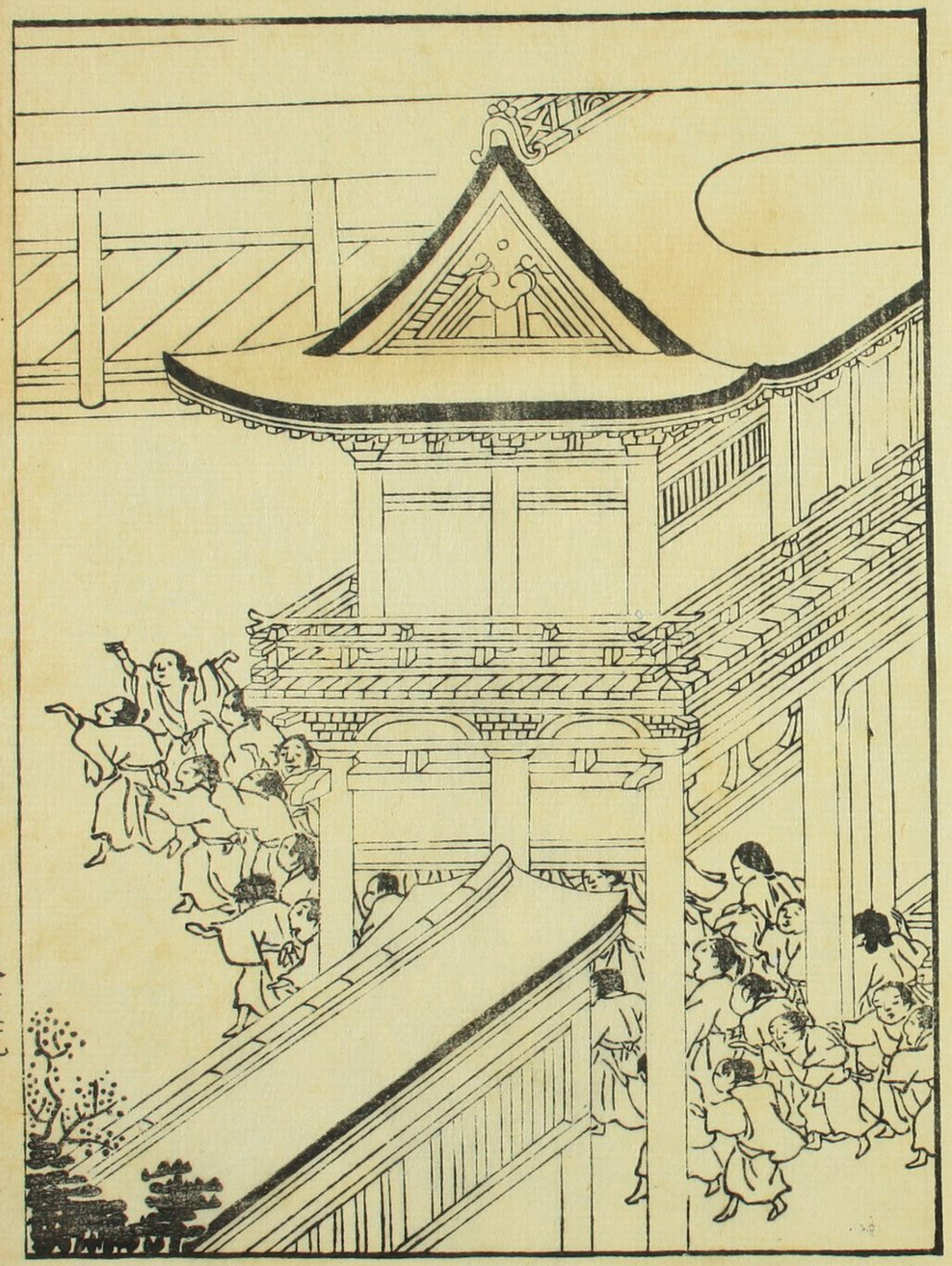
符を授を。自他同生乃悲願我盈願
〻。四句の偈を授給へる
六字名號一遍法十界依正一遍體
萬行離念一遍證人中上々妙好華
上人此偈を賜るとおぼせば。夢覺て心肝
ふ動ず。神殿を拜し首を擧給へば。十
二三許乃童児百餘人手を捧ぐて。我
ヒ上人の念佛を受んと。異口同音ふ南
無阿彌陀佛と唱へ。何處ともなく去ぬ。

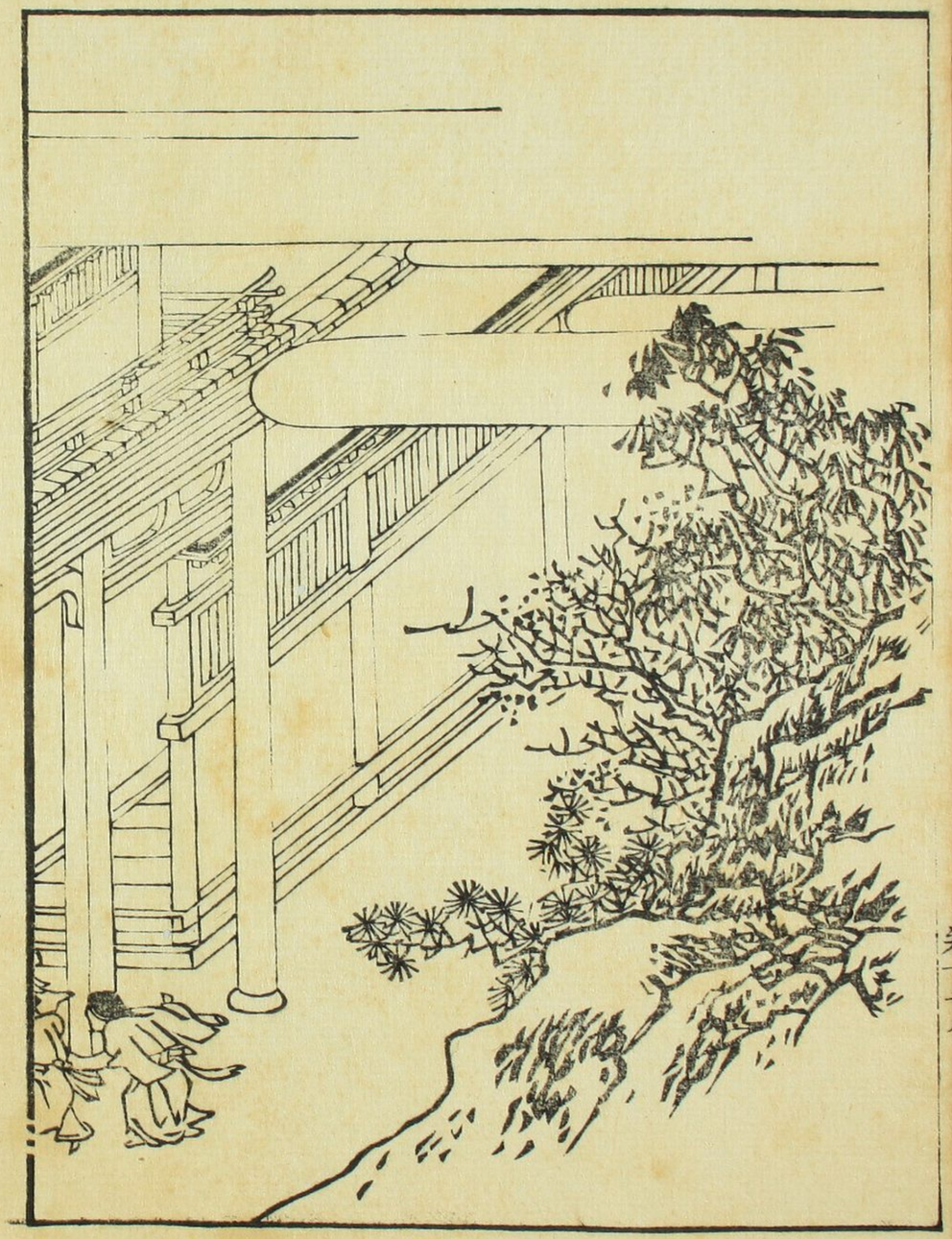
是亦此神乃眷屬。と人の化を助んとて
願を結ふ。ちなばと人を一遍
ゆ號するとへ。偏ふ權現乃勅賜ふ。夫
ふりと人神勅にまする當寺へ奉籠ま
す。此四句の偈乃とこの字をとり。六十萬人
決定往生と書ふ符を諸人ふ與へ給へ。
貴とく賤とく群集〻ふる時ふ。其
中ふりて優ある女房進ミ出て。授給ふ
符をみまゐすべ。六十萬人決定往生と

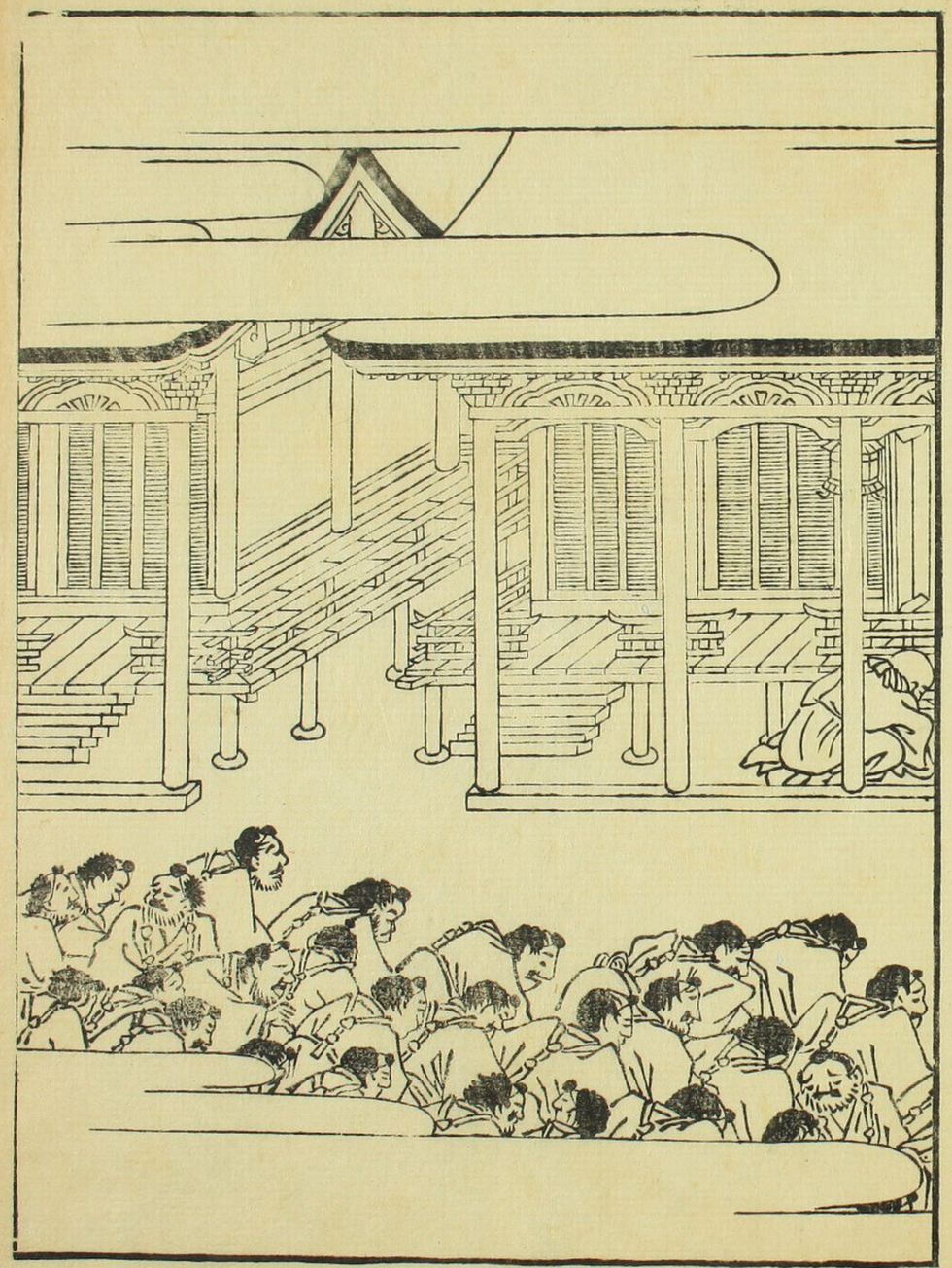
あり。ひらべ此數乃外の衆生。摂取の利益に洩れ給へ不審す。仁人宣いく。弥陀乃悲願無盡極処。堅に六十三世を書し。善惡一切の凡夫。乃至三塗重苦乃衆生まで。普く濟ひまゝ給す廣大無邊の誓願なれば。いうぞこの人數を定むるなぐ。是い神託乃四句の偈文乃四字を取て。證明乃為に題するのことなりけり。事乃次第を委く語て給へ。女房恐びて。紫袋を合を仁人を稱みをるかが。稍ありていく。此御堂乃正面ゆ誓願寺の額あり。是を仁人御手ぢゝ六字の名號を書て掲給へ。是私乃願よあるぞ。此本尊乃御告なりと申よ。仁人驚き。女房い如何なる人ぞ。名いなのを尋給へべ。女房乃いく。みづからい阿弥陀仏なる小御堂。八曼荼羅堂と名づく

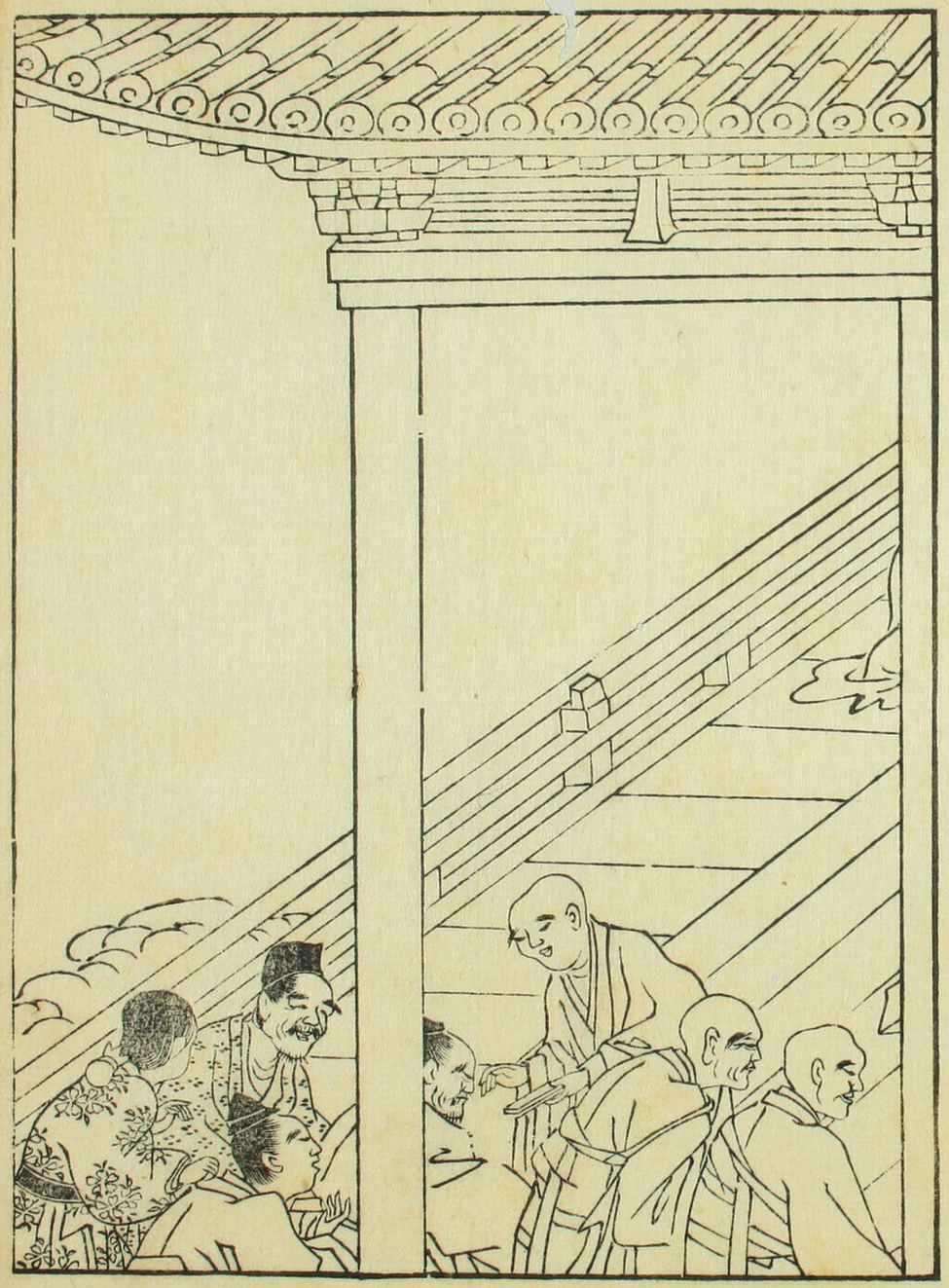
ふ所あて往生をねがふ。何地
をとなく行先を。まことにおのゝと人和
泉式部なるゝ。ほとゝぎす御
使疑へ。即敷のまゝに六字名
號を祥書し。堂とみのぼせ至心に敬
禮し。念佛刻を移し給へ。忽異香薫
じ瑞雲たなびき。音楽乃聲して
奇光暉く。仏御前金容乃阿弥
陀雲中ふ立給し。聖衆圍遶し。式

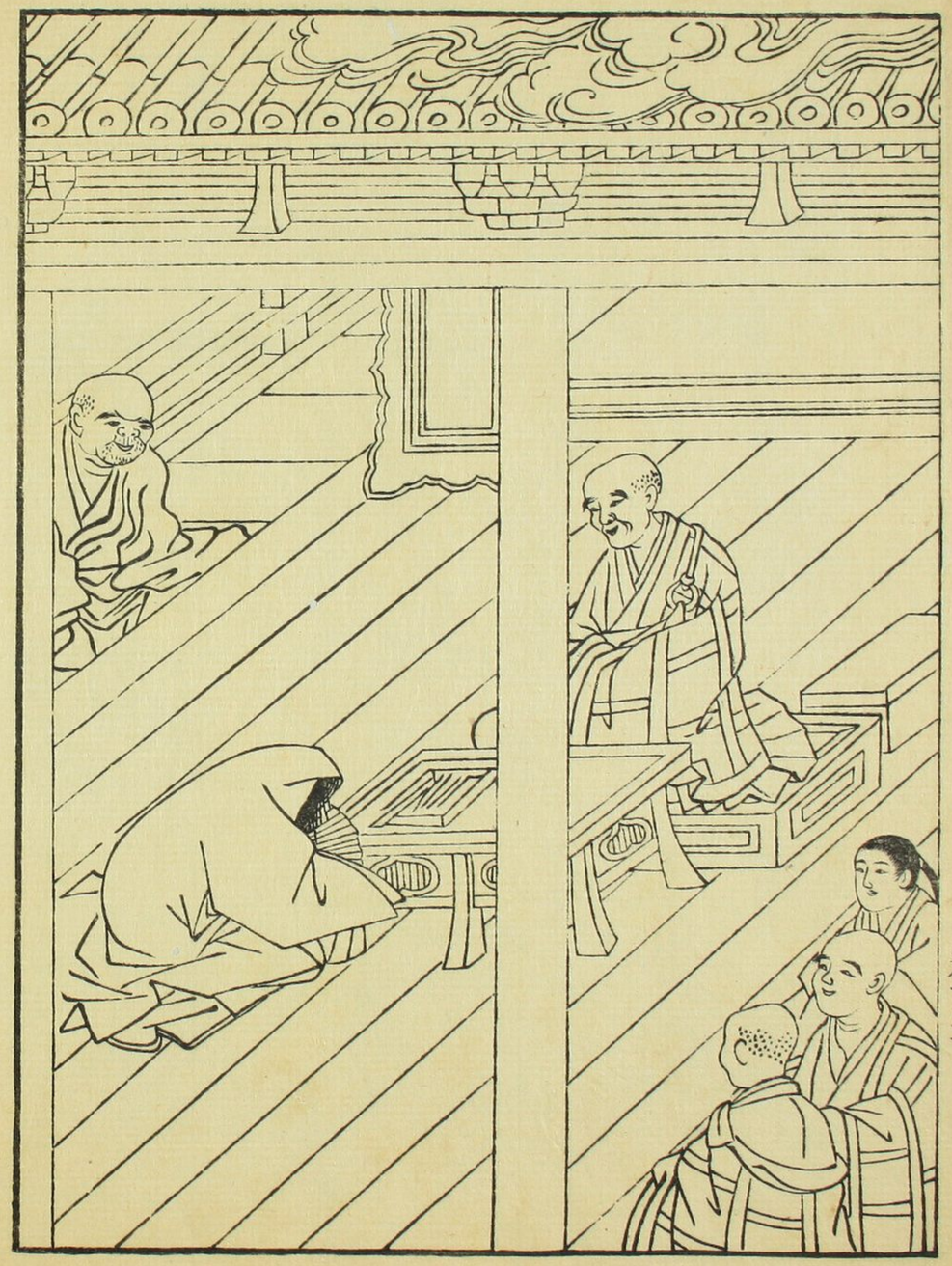
部も亦相從へり。笙歌遥聞孤雲と聖
衆来迎落日前と。寂照法師（大江定基入道）の
句をまのあたりふかりし合掌して尊
うし事なり。ゆきに今乃世ふお
いてを。梁上乃額かゝのごとし











いらかは當寺建立のはじめ。佛乃相好。梁塵の額。小御堂は中縁等。要をやとりて紀をもとめり。此外本尊は現益を崇くくの靈跡。數多お縁起不要しやいへども。事繁きをもとりて略をもぬ。

又因ふるふ。當寺因縁度々たりしが。

壽は法東漸の首縁なり。今の地は選しく。

三十七世數山上人をこゝに中興とす。此時豊供養の御導師は。大覺寺宮

空性法親王小御所ゝ渡御。勅願寺
の事。古記の數多有ゝ。其中ゝ
長興宿禰記云。文明九年六月廿六日
庚戌。今日誓願寺御堂造營立柱也。勧
進坊主（號十穀沙門）興行也。勧進帳一條禪閤
御作也。
半陶藁云。京師誓願寺者。西方教主無
量壽大願王道場也。天智天皇勅創
其基。殿裏底乃春日慈悲萬行菩薩之

所親刻也。爾来八百餘載。感應無比。一
華一香結其緣者。一拜一聲致其敬者。
三世之願。無不成就。故雖廢而必興如
夕之有朝矣。一炬於應仁之初。再造文
明之末。蓋使樂施者數起。福因亦善巧
之一端也。
右今回再建乃旨趣同じ。ゆえ
掲出畢
寛政四年壬子秋八月　慧明謹校

洛陽誓願寺藏版

畫圖　法橋東洲